

## 「洋画考」

統計課・統計指導担当

香山 俊

いつだったか、映画史上のベストテンを選んだ時に、確かベストワンに選ばれたと記憶しているのが、オーソン・ウェルズの監督主演による「市民ケーン」であった。確かにこの映画も傑作だったが、私は「第三の男」での演技が(主役ではなかったが)強烈に印象に残っている。オーソン・ウェルズは誰しも認める名優であるが、その強烈な個性から鬼才、怪優などと呼ぶ者もいた。シェイクスピアの三大悲劇の一つである「マクベス」でも名演技を見せた。この「マクベス」を日本では黒沢明監督が「蜘蛛の巣城」というタイトルで映画化し、マクベスに当る武将を三船敏郎が演じ、ラストシーンでは全身に矢を射られて死ぬという命がけのシーンを演じた。名監督では、スウェーデンの巨匠イングマール・ベルイマンも忘れることができない。同氏の「処女の泉」、「野いちご」、「夏の夜は三度微笑む」等、芸術性の香り高い名作を世に出している。「エデンの東」、「理由なき反抗」、「ジャイアンツ」の僅か三本にしか出演せず、交通事故で夭折したジェームス・ディーンは、その余りにも早い死に方に、その才能を惜しまれ、今でも人気があるようだ。「ジャイアンツ」でのエリザベス・テーラー、ロック・ハドソンとの競演は見応えがあった。和製ジェームス・ディーンと言われたのが、日活の赤木圭一郎で奇しくもやはり若くして事故で死んだ。テーマ音楽が素晴しく今でも耳の奥に残っているのは、「第三の男」のアントン・カラスのチター演奏、「禁じられた遊び」のナルシソ・イエペスのギター演奏、それから「鉄道員」、「刑事」、「太陽がいっぱい」等の映画音楽である。「太陽がいっぱい」は音楽と共にアラン・ドロンの悪役で名演技を見せた。アラン・ドロンは数多くの映画に主演しているが、「太陽がいっぱい」での演技が最高であろう。暗黒街ものと言うか、ギャングとかマフィアなどを主人公にした映画にも傑作が多い。ハンフリー・ボガードの「カサブランカ」、「三

つ数えろ」、ジャン・ギャバンの「望郷」、「現金に手を出すな」、ジェームス・キャグニイの「汚れた顔の天使」、マーロン・ブランド、アル・パチーノの「ゴッドファーザー」等々、映画史上に残る名作だ。大作と言われるものでは、デビット・リーン監督、ピーター・オトゥル主演の「アラビアのロレンス」、オマー・シャリフの「ドクトルジバコ」、ヘンリー・フォンダの「戦争と平和」、天才モーツァルトを主人公にした「アマディウス」、リチャード・アッテンボローの「ガンジー」、ウィリアム・ホールデン、早川雪州、アレック・ギネス、ジャック・ホーキンス等が共演した「戦場にかける橋」等を観たが各々迫力満点で堪能できた。ミュージカルは、観る前は歌と踊りの映画など余り面白くないのではないかと思っていたが、これが観てみると意外と面白く考えを改めさせられた。ジョージ・チャキリス、ナタリー・ウッドの「ウエストサイドストーリー」、ジュリー・アンドリュースの「サウンドオブミュージック」、オードリー・ヘップバーンの「マイフェアレディ」、キャロル・リードの「オリバー」など素晴しかった。所謂ロマンスものでは、グレゴリー・ペックの「紳士協定」、オードリー・ヘップバーンの「ローマの休日」、ロバート・テーラー、ビビアン・リーの「哀愁」などの秀作が印象に残っている。自分の作品には必ず通行人とかでちょこっと登場するというアルフレッド・ヒッチコックの「北々西に進路をとれ」(ケーリー・グラント、ジェームス・メーソン等出演)、「めまい」(キム・ノバク)等、スリルとサスペンスに富んだ映画も面白かった。最後に、忘れてならないのは、喜劇の王様チャップリンであろう。チャップリンは無声映画時代から夙に有名で、自分で監督も音楽もやり主演もするという八面六臂の治羅で、彼の映画はどれもこれも傑作で映画史に燦然と輝いている。



# 経 済 動 向

## 国内の動き

### ●日本企業のM & A 33%増で過去最高

日本企業のM & A（企業の合併・買収）が急増している。89年度に日本企業が買収したり、された件数は740件と88年度に比べ33%増え、過去最高となった。日本企業が海外企業を買収する例が対欧州を中心に急増しているのが特徴だ。92年度の欧州共同体（EC）市場統合にうまく対応する

ため、現地での販売・生産体制を強化するのが狙いようだ。89年4月から今年3月末までのM & Aの内訳を見ると、日本企業が海外企業を買収した案件が448件（88年度比34.1%増）と急増、なかでも、欧州企業の買収が、88年度の倍近い114件となった。（日経 4月15日付）

### ●1人当たりの県民所得…東京は沖縄の2.04倍、全国平均は235万円

経済企画庁は、1987年度の県民所得計算を発表した。都道府県別の1人当たりの県民所得は1位の東京が最下位の沖縄の2.04倍となり、86年度の2.01倍よりさらに拡大、現行方式で統計を取り始めた75年度以降で最大の格差になった。全国平均の1人当たりの県民所得は235万円で、景気

拡大の恩恵を受けて伸び率は5.9%と前年度（3.0%）を大きく上回った。東京の1人当たりの都民所得は344万1千円。最下位の沖縄の所得は168万8千円だった。

（日経 4月14日付）

### ●「経済」さらに突出、「生活環境」は遅れ 90年版国民生活指標

経済企画庁は、暮らしぶりを指数化して国際比較などができるようにした1990年版の国民生活指標（NSI）を発表した。欧米の先進5ヶ国と比べた日本の生活水準は、「経済安定」では首位で他国との差を昨年より広げたが、有給休

暇の日数や1戸あたりの住宅面積、下水の普及率などは最下位だった。相変わらず経済だけが突出し、生活環境面の遅れが目立った形になった。（日経 4月13日付）

## 県内の動き

### ●つくば周辺に新都心「グレーターつくば構想」

茨城県は、グレーターつくば圏（県南・県西地域43市町村）の21世紀初頭に向けての将来ビジョンとなる「グレーターつくば構想」の最終案を策定した。筑波研究学園都市に集積した発展のエネルギーを県南・県西地域の振興に結び付けるのが狙いで、21世紀の首都機能の一翼を担う地域と

しての育成や、田園都市空間としての整備などの方針を織り込んでいる。今後は構想の具体化のため、常磐新線、首都圏中央連絡自動車道などの早期実現を目指し、また事業用地の円滑な取得方法などを検討する。

（日経 4月12日付）

### ●中規模飲食店が急増、小規模店は減る

ファミリーレストランなど郊外型中規模店の出店攻勢が零細規模の飲食店の経営を圧迫。茨城県が昨年10月1日現在で実施した商業統計調査（一般飲食店）の結果、県内の飲食業界についてこんな実態が浮かび上がった。県内飲食

業界の店舗数は9,065店で、前回調査時（昭和61年）と比べ358店（3.8%）の減少。ただ内容を見ると減少しているのは従業員規模1～4人の小規模店ばかりで、5～49人の中規模店は大きく増えている。（日経 4月4日付）